

1	言語	言葉の力をつけよう（音読3年③） 〔歌物語「伊勢物語」〕	名前	解説

★知っておきたい古典の知識

注1こうしやう

日本では口承文学の時代から短歌や長歌などの和歌のリズムに親しんでいたことが『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』などからうかがい知ることができます。その後、平安時代に入り、五七五七七の和歌は貴族の生活に欠かせないものになっていきます。人生のいろいろな場面で歌われる和歌は、その歌の詠まれた状況を説明する「詞書」とともに多くの人に楽しまれました。この「詞書」が詳しく書かれたものが「歌物語」という物語の種類となりました。

「歌物語」には『伊勢物語』のほか『大和物語』や『平中物語』などがあります。

注1 口承文学…口伝えの文学のこと。

身に付けると…

日本文学の流れを感じることができます。

物語のうつりかわりも知ることができます。

文学の魅力を知り、人に伝えることもできます。

読んでみよう

◆ 文章は「東下り」と呼ばれる章段の一部です。「から衣」の歌は、和歌の技巧を思う存分使いながら、都を遠く離れた人々の心の中を見事に表現しています。

《口語歌》

昔、男がいた（そうだ）。その男は自分を役に立たないものと思い込んで、京の都にはおるまい、東国（とうごく）のほうに自分の住むべき国を探しに行こうと思って行つた。以前から友人であつた人の一人、二人と一緒に道を知っている人もいなくて、迷いながら行つた。三河（みかわ）の国の八橋（やつはし）というところに着いた。そこを八橋（やつはし）といったのは、水の流れて行く川が蜘蛛（くも）の足のよう（八方に分かれていた）ので、橋を八つ渡してしたこと（八橋）と言つたのだ（そうだ）。その沢（さわ）のほとりの木の陰（かげ）に降りて座（ま）つて、乾飯（かれい）の花（はな）がとても美しく咲いていた。それを見て、ある人が「かきつばたという五文字（ごもじ）をそれぞれ（それぞれ）の句（く）の一番上（いちばんうへ）において、旅（たび）の心を詠（よ）め。」と言つたので詠んだ。繰り返して着ては慣れ親しんだ唐衣（からえ）のように、慣れ親しんだ妻（つま）が（京（きやう）に）いるので、はるばるきてしまった旅（たび）のことばかりが思われることだ。と詠んだので、そこにいた人は皆、涙（なみだ）をはらはらと流（なが）し、乾飯（かれい）がその涙（なみだ）ふやけてしまった（そうだ）。

《語句の説明》

けり…過去の助動詞。「人から聞いた（伝聞）」という意味があります。発見や気づきの感動、詠嘆（えいたん・深く感動すること）を表すこともあります。なむ…係助詞（かかりじょし）。強調表現。文末を連体形で終わります。この決まりに係り結びの法則（はふそく）といひます。いと…たいそう、とても。非常に。おもしろく…目の前（まへ）が明るくなり、心が晴（は）れ晴（は）れとする様子（ようす）を表します。自然（しぜん）の情景（けいけい）がとても素晴らしいときなどに使（もち）われます。たり…完了（りんぎ）の助動詞。完了（りんぎ）（終わつてしまふ）、存続（ぞんぞく）（そうしてゐる）、

《和歌の表現技法》

から衣…「着（き）」にかかる枕詞（まくらことば）から衣（き）つつ…序詞（じよことば）なれ（な）（馴（な）れ・褻（せ）れ）…掛詞（かけことば）（慣れ親しむとのり気がなくなる）つま（妻・褻）…掛詞（妻と着物の褻）はるばる（遥々・張る張る）…掛詞

《「伊勢物語」について》

十世紀の初めごろに成立したといわれています。作者（そふ）はよく分かっていません。主人公（しゅじんこう）は在原業平（ありはらのなりひら）ではないかといわれています。在原業平（ありはらのなりひら）は皇族出身（こうぞくしゅしん）の美男（びなん）の貴公子（きこうし）でしたが、政治（せいざ）的には恵（めぐ）まれない一生（いっしやう）を送（おく）りました。「東下り」の主人公（しゅじんこう）と重（おも）なります。また、「から衣」の歌は『古今和歌集（こきんわかしゆ）』に在原業平（ありはらのなりひら）の作（さ）として載（の）せられています。「六歌仙（むつかせん）」の一人（ひとり）である業平（なりひら）の歌の實力（じきり）をうかがい知（し）ることができます。

き（来・着）…掛詞（かけことば）褻（せ）れ・褻（せ）れ・張る（は）る…「から衣（からえ）」の縁語（えんご）折句（おりく）…和歌（わ）の各句（かくく）の初（は）じめに物（もの）の名（な）を一字（いちじ）ずつ置（お）いて詠（よ）む技法（ぎふ）です。から衣（からえ）き（き）つつなれ（な）にし（し）つ（つ）ましあれ（あれ）は（は）るばる（はるばる）きめる（きめる）た（た）び（び）をし（し）ぞ思（おも）ふ